

カント倫理学研究 —『道徳形而上学原論』を中心に—

王 菲

ここに二つの物がある、それは——我々がその物を思念すること長くかつしばしばなるにつれて、常にいや増す新たな感嘆と畏敬の念をもって我々の心を余すところなく充足する、すなわち私の上なる星をちりばめた空と私の内なる道徳的法則である。¹

第一章 はじめに

『実践理性批判』の結論部にさりげなく書かれたこの章句に接したとき、特に、その道徳法則への感嘆と畏敬の念を知らされたとき、少なからず衝撃を受けた。カルチャー・ショックとでも言えようか。

道徳という言葉そのものは、もちろん中国古来の漢語であり、今日でも我々は日常よく口にする。だが、必ずしもこれ程の重い意味をこめて使っているとはかぎらない。このちがいはどこからくるのだろうか。

我々中国人の西洋文化に対する馴染みの薄さが背景にはあるのかもしれない。というのも、大学教育においては、一般的な西洋歴史は学ぶものの、特に専攻でしなければ、西洋思想（マルクス主義は別として）については学ぶ機会はないからである。私個人に関しても、日本語学科に属していた関係で日本文化についてはさまざまな分野にわたりそれなりに修得したが、西洋倫理についてはほとんど教わることはなかった。カントについても、名前程度の知識しかなかった。

本研究は、こうしたハンディキャップを負いながらも、あえて心に受けたこの衝撃を奇貨として、カント倫理学における道徳の概念を解明しようとする企てである。

近世ドイツの理性主義がカント思想の背景にある。近世のヨーロッパでは、倫理思想の特徴は理性を尊重することである。合理主義は言うまでもなく、経験論と一部の感情主義も、ある程度まで理性を肯定して尊重する。これは近代の自然科学が発展した必然的な結果であり、ヨーロッパの啓蒙思想運動が中世の宗教神学を否定した必然的な結果でもある。17、18世紀の啓蒙思想運動は、人類の思想の一大解放であった。その思想の重点とはすなわち理性に対する称賛と高揚である。啓蒙運動の思想家たちは強力に理性が人類が宇宙を理解して、自身の条件を改善する重要な力であることと、理性を備える人が必ず知識、自由、幸福を人生の三つの大きな目標と見なすことを宣揚する。彼らは理性が神性にとって代わることを鼓吹して、個性の解放と思想の自由を追求する歴史的な要求を示した。こう

いう思想が進んできた歴史の流れの中で、合理主義が直ちに大陸倫理思想の主流となった。例えば、フランス、ドイツとオランダに、相次いでデカルト、ライプニッツとスピノザを代表とする大陸合理論が現れた。合理主義がイギリスの経験論者の感性主義およびさまざまな非合理主義とまったく違って、人間性が理性にあるとの主張を堅持して、しかもここから道徳の起源、内容と基準を論証する。カントの時代に合理主義はすでに思弁哲学の魂になった。合理主義がカント倫理学体系の中で最高峰に達した。

18世紀ドイツ合理主義の啓蒙思想を背景にして、カントはドイツ合理主義を集大成した代表人物である。その批判理性主義を哲学の基礎として、純粹倫理学の分野においても同じくコペルニクスの革命を起こした。カントは倫理学が人間のもつ理性を出発点としなければならないと主張し、理性的存在者が目的そのものとしての価値（尊厳）をもつことを肯定し、道徳的行為の普遍必然性の法則を明らかに示した。こういう根本的な立場に立脚しつつ、丹精こめて厳密な道徳形而上学の体系を構成した。

第二章 『道徳形而上学原論』に対する解析

善と称せられるところのものはたくさんある。しかし、これらの善があらゆる場合において善というわけではなく、至極の悪にもなり得る。すなわち、それらは単に条件付きの善であって、それ自体として善であるとは言えない。それらは善意志の使用によって善となるのである。「我々の住む世界においてはもとより、およそこの世界の外でも、無制限に善と見なされ得るものは、善意思のほかにはまったく考えることができない」²とカントは考えた。唯一の無条件的善とされる善意志は、一切の道徳的価値の必要条件である。そればかりではなく、カントはさらに一步進んで、善意志はそれ自体として善なのであると指摘した。すなわち、そのもたらす結果の善さや有効性ゆえに善なのではない。善意志こそ、無条件的な内的価値をもつものである。カントによれば、普遍的な道徳的価値は、神からでも、人間の自然本性と世俗の権威からでもなく、人間の理性そのものの善意志由来しなければならない。善意志は快樂、幸福、功利のために善となる道徳的善ではなく、それ自体として善であるという道徳的善である。

カントによれば、我々は善意志を理解するために義務の概念を考察しなければならない。「義務の概念は、或る種の主観的な制限や障害を蒙りはするものの、しかし常に最高善の概念を含んでいる」³からである。カントは、善意志によって普遍必然性をもつ道徳法則にしたがって行為することを義務と呼ぶ。人々の行為にはさまざまな動機が含まれているから、同じ結果をもたらした行為でも異なる動機に基づくのかもしれない。行為の道徳的価値はその動機によって評価されるべきとカントは考える。これは一つの行為が義務に従っている（aus Pflicht）か、或いは義務にかなっている（Pflichtmäßig）かの議論の出発点である。一つの行為が義務に従ってはいはじめて、つまりただ義務を動機とするときだけ、道徳的価値をもつ。カントは義務の日常の生活の中での役割を三つの命題にまとめる。義務の命題のほか、カントはまた義務の分類を行った。その基本的な分類が、自己に対する

義務、他人に対する義務、完全義務と不完全な義務である。カントは義務を、人間の理性が日常的な生活のなかで見出し得る原理であると考えた。しかし、これは義務が経験的概念であることを意味するのではない。義務はア・プリオリな理性的な概念である。ゆえに、義務は一切の道徳的価値の源泉であり、その根拠をア・プリオリに純粋理性の概念のなかに求めなければならない。このように、義務の概念は法則の概念と緊密に関係するようになる。

普遍的必然的な道徳法則を導出しようとするのがカント倫理学の著しい特徴である。法則が意志を規定する根拠である。道徳法則は直接には人間の行為を規定し得ない。人間が法則を表象することによって行為の原理を制定する。この原則が格律（Maxime）と呼ばれる。格律は行為の主観的原理であり、必ず客観的原理、すなわち実践法則と区別しなければならない。善い行為は、行為の格律が道徳法則に準拠しなければならない。

道徳法則も自然法則と同じように、その命題が論理的な形式によって表現され得る。この命題は陳述式ではなく、命法（Imperativ）である。このように命題のなかに、必然性や普遍性を表すことばが、「である（Sein）」ではなく、「すべき（Sollen）」である。さまざまな命法のなかで、定言（kategorisch）命法のみ実践的法則と称され得る。定言命法と対立するのは仮言（hypothetisch）命法である。仮言命法は行為の実践的必然性を目的に達する手段と見なす。仮言命法はすべて条件付きである。それに反して、定言命法はいかなる条件も持たない。

定言命法はア・プリオリな必然的な命題である。それは、いかなる傾向性（Neigung）、感性的欲望、利己心による条件も前提とせず、すべての主観的動因に権威のある理性的概念（たとえば、義務）によって行為と意志を結びつける。定言命法はまた総合的命題である。行為の意志を分析的な方法によって前提されている意志の中から導いてくることはできないからである。要するに、定言命法はア・プリオリな総合命題として、その必然性がなんらかの前提や、経験または概念の分析に基づかないのである。

カントはさらに形式、実質、全体という三つの面から定言命法を論述し、それぞれの公式を規定する。

意志と実践理性とは、別々の両者ではない。いわゆる意志を有するということは、法則を表象し、行為する能力を有することである。すなわち、原理にしたがって行為する能力のことである。ただ理性的存在者のみがそのような能力を持ち得る。法則を実践に移し、行為を法則の中から導いてくるためには、理性がなければならない。このように意志がすなわち実践理性であるということ証明した。

善意志と自由意志は純粋理性が実践を導く上での必然的な産物である。善意志はすなわち自律の意志であって、自由意志である。また自律の概念と自由の概念とは切り離せない関係にある。自然必然性に規定される意志は他律的であるのに対し、自由な意志は自律的

である。意志の固有の性質とはそれ自体の自律性である。したがって、自由意志と道徳法則に従っている意志とはまったく同じものである。

ここでカントは一種の循環論に陥っている。つまり、一方では、我々は自らの具備する実践理性の事実として道徳法則の下にあると自覚するがゆえに、その前提として我々の自由を想定し（「道徳法則は自由の認識根拠である」）、他方では、我々が実際に自由である、つまり、自然必然性に左右されない自発性の能力を持つがゆえに、定言命法の正当性の根拠が与えられる（「自由は道徳法則の存在根拠である」）、とするからである。

この循環論をほどこためにカントは道徳的精進の無限進行（unendliche Progress）という要請論を展開する。つまり人間は、不断の道徳的実践を積むことによって道徳法則の完全な実現、自由の実在化に近づくべし、という議論である。この関連で靈魂の不死や神の存在が要請される。本論文では、このような要請論に踏み込むまでには至らなかった。

カントは批判哲学に立ちつつア・プリオリな諸概念を根拠として、道徳論を展開した。その思弁的な論証は、時には晦渋であるが、かつてない謹厳さと熱心さで、道徳の真の源泉が意志の自律にあること、道徳性が格律の純粹性にあること、そしてこのような道徳の実行者たるところに人間の尊厳があることを論じた。そしてその最終的結論は、道徳的精進の無限進行という要請であった。確かにこのようなア・プリオリな道徳理論は高く聳えているがゆえに、実行は不可能であるかに見える。しかし、人間の向上心、主体性に期待し、「汝、なすべきがゆえに、為し能う」とはげまし、呼びかけている理想主義的倫理学として評価できると思われる。

第三章 おわりに

（一）道徳法則に対する尊敬

カントは道徳法則に対する彼の尊敬（Achtung）⁴の感情を、星繁き天空に対する彼の感情と比較している。カントにとって尊敬の感情は独自なものである。それは感官に与えられる対象に対するものでも、また我々の自然的傾向の満足と結びついたものでもない。それは、「意志が法則によって直接に規定されるということ、および意志がこのようにして規定されているという意識」⁵である。尊敬は理性概念がみずから作り出した感情である。それは結果であり、原因ではない。尊敬の感情を規定する原因は、純粹実践理性にある。それだからこの感情は、感性的なものではなくて、実践的に生ぜしめられたものである。「道徳的法則に対する尊敬は、知性的根拠によって生じるような感情である。この感情は、我々がまったくア・プリオリに認識し得ると同時に、またその必然性を洞察し得る唯一の感情なのである。」⁶ここで注意を払わなければならないことがある。すなわち道徳法則に対する尊敬が道徳性を発生せしめる動機ではなくて、この感情がとりもなおさず道徳性の主観的感情そのものである。道徳法則が我々の意志に対して拘束的であるということをも認めるがゆえに我々は尊敬を感じるのである。

「意志の自律は、一切の道德法則と、これらの法則に相応する義務との唯一の原理である。」⁷

純粹実践理性の根本法則は、すなわち「君の意志の格律が、いつでも同時に普遍的立法の原理として妥当するように行為せよ」⁸である。純粹実践理性においては、実践的規則が無条件的である。純粹かつ実践的な理性が直接に法則を与える。意志は、純粹意志として法則の単なる形式だけによって規定されている。純粹実践理性は本来立法的である。したがって、この法則はいかなる純粹直観にも、いかなる經驗的直観にもとづかないア・プリオリな総合的命題である。これは道德法則の形式である。それと密接に関係するのは、自律の道德法則である。「意志の自律は、意志の特性であり、意志はこの特性によって自分自身に対して法則となる。すると自律の原理はこうである、——『意欲が何かを選択する場合には、その選択の格律が当の意欲そのもののなかに、同時に普遍的法則として含まれているような仕方ではしか選択してはならない。』」⁹この自律の原理が道德哲学における唯一の原理である。自律の原理は定言的命法であって、この命法が命令するのはまさにこの自律である。道德法則の本質は、意志が經驗にかかわらなく（消極的概念の自由）、格律の単なる立法形式だけを自分の従うべき法則たらしめる（純粹実践理性が自己立法するという積極的概念の自由）ということにある。それだから道德法則は無条件的で、道德的に純粹であり得る。ゆえに、「道德法則が表現するのは、純粹実践理性の自律すなわち自由にほかならない。この自律こそ、およそ格律の形式的条件であり、一切の格律はこの条件のもとでのみ最高の実践的法則と一致し得るのである。」¹⁰

以上、カントは道德の眞の源泉が意志の自律にあること、道德性が格律の純粹性にあること、そしてこのような道德性の実行者たところに人間の尊厳があることなどを論じてきた。

（二）カント倫理学の現代的意義

カント倫理学はよく内容を欠いている、嚴格主義だと批判されるが、その形式主義と理性主義は依然として意味を持っている。たしかに定言命法は空虚な形式ではあるが、それを個々の状況に即して理念的に適用しようと考慮するならば、一つの理想であると言ってよいだろう。この形式に基づいてはじめて、一歩進んで形而下のものを議論することができるからである。

近世以来、日進月歩に発展してきた科学技術によって、多くの夢や欲望が叶えられたが、欲望は欲望を再生産し、歯止めがなくなっているように見える。いまや人類はますます心の迷宮に入り込みつつある。眞善美の価値がますます経済的で実用的な現実の需要に譲られていく一方である。生命倫理、医療倫理、環境倫理などの応用倫理学が人々の関心を集めている。カントの倫理思想がすでに現代の倫理問題に適応していないという声も時に聞かれる。だが、強烈な理想主義の傾向を持つカントの道德哲学は、人間性を深く見抜き、自由意志を持つ人間が「なにを為すべきか」から「なにを望んでよいか」への問いへと人間を導く。カントの倫理思想はたしかに現実の問題を直接的には解決することができない

かもしれない。しかしそれが人間のあるべき理想像を示している点で、迷宮からの脱出口への道しるべとなるだろう。

-
- 1 カント『実践理性批判』（波多野精一訳）岩波文庫317ページ
 - 2 カント『道徳形而上学原論』（篠田英雄訳）岩波文庫22ページ
 - 3 カント『道徳形而上学原論』（篠田英雄訳）岩波文庫30ページ
 - 4 H.J.ペイトンは『定言命法』のなかでドイツ語「Achtung」の訳語について論じ、「崇敬」（reverence）と訳した。ここではその区別をせず、岩波文庫版の訳本にしたがって「尊敬」とする。H.J.ペイトン『定言命法 カント倫理学研究』杉田聡訳、行路社、1986年7月。
 - 5 カント『道徳形而上学原論』（篠田英雄訳）岩波文庫40ページ
 - 6 カント『実践理性批判』（波多野精一訳）岩波文庫155ページ
 - 7 カント『実践理性批判』（波多野精一訳）岩波文庫78ページ
 - 8 カント『実践理性批判』（波多野精一訳）岩波文庫72ページ
 - 9 カント『道徳形而上学原論』（篠田英雄訳）岩波文庫129ページ
 - 10 カント『実践理性批判』（波多野精一訳）岩波文庫78ページ

（弘前大学大学院人文社会科学研究所）